

ゆとりもできてきました。

何の用事があるのか、小走りに走っていく人、太いステッキをかかえこむようにして人力車を急がせる人——忙しくさわがしい町のざわめきの中で、四郎の心はだんだんと静まり返っていききました。突然、うしろの方で、大きな汽笛が鳴りました。昨年、宇都宮まで開通した汽車が、上野駅を出発したのでしよう。

万世橋を渡りながら下を見ると、神田川の水が静かに流れていました。午前
の明かるい太陽が、ときどき、水にきらきらと輝いては、また流されていきま
した。

「そうだ。流れにさからつてはいけない。流れに従う。たおそう、たおそう
というあせりの心をおさえるのだ。そうだ、自分にかつのだ。」

なつかしいおじいさんのやさしい目と、嘉納治五郎のきびしくするどい目を